（復刊28号）

日本女医会の将来を想う

会長　龍　知恵子

灯火したしむの候となりました。皆様には御健勝でいらっしゃる事とお喜び申上げます。国際女医会の参加だけが日本女医会の仕事ではないという御叱責もありますが一言ふれさせていただきます。

本年の国際女医会参加行は非常に有効であり快適であったと満足していただき、理事一同も喜こんでおります。

私は老母の病気の為に参加出来ませんで、申訳ございませんでした。三神先生に団長をお願いしたことは大変によかったと存じます。

年を経、回を重ねる毎によい考えも浮かび、昨年から何度となく相談の上、この度は、お三人の方々を御推選いたし責任範囲を分けてお願い致しました。

小野先生は、国際連絡書記としての才能を充分に発輝していただく為に、連絡書記としての国際的な事務処理のみをお願い致しました。

山崎先生は、団長に代っての講演者としてお願いし、本部では資料を集める事のお手伝いをいたしましたが、あとは全部先生の御一存にお任せして、山崎先生はこの講演の事のみに没頭していただきました。佐野先生は、三神先生の秘書格として常に三神先生の身辺にあって、万事三神先生のご指示により行動していただき、学会のこと、国際女医会の事務的なことは一切お願いしないことにいたしました。

参加者の方々の買物等の為に、本部から御推選申上げた先生方がいつも悩まされておいでなので、この度はこの方面のことは、全部交通公社の人が受け持つことにいたしました。

右の様な方針でこの度の国際女医会参加のプランを立ててまいりましたので、今年は皆様が揃って非常に快適なご旅行をしていただけたのではないかと存じます。

今年まで国際女医会の総会に参加の為四回の渡航の内、第二回目からの六年間の小野先生のご苦労に対しては心からお礼を申上げます。今後は一層忙がしいことが増すばかりでございます。国際連絡書記の仕事は全く多忙で、少なくも一ケ月に二回は羽田空港へ出迎え、ホテルに訪問し、又見学をたのまれたり、海外からの国際女医会員への応接にいとまがないのでございます。その間に常に国際女医会本部との連絡事項がございます。小野先生には全く感謝の言葉もありません。

——〈・〉——

本年の総会の折にも御意見が出ましたが、尚お手紙での御進言もあり、私もつね日頃考えておりますゆえに痛切に感じさせられます事は、「**日本女医会の今後の歩み方**」でございます。

新会員の獲得！　会費納入！　としきりに本部でお願いいたしますので事務の方々も非常に心をつかって下され、お陰様で大分皆様の御協力が得られまして、会費の納入率は高まってまいりました。

いつも申上げます様に、仕事をするために寄付を集めるのは非常に骨の折れる困難なことであることは、実際に私も経験してまいりました。

この頃はあきらめの様に考えるのでございます。しかし日本女医会では現在の四十才、五十才の若い会員の皆様が本気に仕事をなさる気構えになられる迄は、少しまとまった資金を蓄積してあげたらと思うのでございますがいかがでございましょう。現在のところ真剣に日本女医会の仕事をしょうと思って下さる方はないように思います。

四十才、五十才の若い方々に期待をかけて、せめて資金づくりをするよりほかに道はないのではないでしょうか。この事もあまり御賛成を得られないかも知れません。

然し「**日本女医会はこのままではいけない！**」ということは皆様が考えておられます。

何か仕事をしょうと思うときは、馬鹿らしいと思っても、皆一様にどなたもが身分相応の出血をしてまいらねば何も出来ません。骨も折らずに、損もしないで、よい仕事をしょうにも出来ません。何とか資金を獲得する方法を考え、適当な時に財団をつくり、少なくも四、五千万円のお金が集まってから仕事をしてはいかがでしょうか。

先年ヨーロッパでの旅行の途中アメリカの前会長のリード女史が、アメリカではブラックウエル賞というのがあり、それがどんな理由で出来たか熱心に話してくれましたが、語学の拙ない私には何のことかサッパリわからなかったのでした。

然しこの度そのブラックウエル賞というのをその国際女医会長のフィリッピンのデルムンド女史が貰ったそうです。やっとリード女史のあの熱心な説明が理解できました。然もこのエリザベスブラックウェル夫人という人は恰度日本の吉岡弥生先生のようにアメリカの女子医学教育の創始者だという事、その夫人の偉業を永遠にたたえる為に出来たのがブラックウェル賞だと聞いて、日本女医会にもお金があれば、日本女医会賞とか吉岡弥生賞とかいうものもつくれるのになどと、私は直ちに考えました。

日本女医会の創始者の吉岡弥生先生は本当に偉い方だと思います。然し現在でこそ吉岡先生と云えば女子医大と誰もが思いますが、何十年何百年ののちの将来は東京女子医大の名はのこっていても、吉岡弥生先生の名は忘れられるかも知れません。永遠に残るというものはやはりブラックウェル賞の如きものだと思います。

——〈・〉——

若しみなさんがお前は日本女医会員として何をやりたいのかとお聞きくだされば、「永年日本女医会の仕事としてこんなことを考えておりました」、と申上げます。

一、小児の専門病院が欲しい。（現在日本に一つ）

一、各地に衛生的な托児所をつくりたい。

一、働く母親の為に一年保育をしてあげたい。

一、看護婦不足を補う為に準看護婦の養成所を作りたい。

決してこれが最適なものとは考えません。唯日本女医会の事業として、私が永年考えていたことでございます。まだまだ女医としてせねばならないことはいくらもございましょう。

——〈・〉——

現在しきりに社会問題になっております献血の問題は、一昨年の秋に日本女医会の仕事として適当か否かを研究いたしました。

副会長と庶務の理事とご一緒に日本赤十字社の本社で副社長の田辺繁雄様にお目にかかりその御紹介で献血の責任者のお三人の方にお目にかかりまし

た。

日本女医会としては、各地区で住民の方々によびかけて献血を依頼し、女医が窓口になって申込みを受けつけ、相当数にまとまったら各区で何ケ所かまとめて、順次採血車を回してもらったら相当量の血液が集められるのではないかと考えてまいりましたが、日赤側のお話を承わりますと。

(1)日赤の預血を日本女医会の方々が各病院で使うようにP・Rして下さい、

(2)採血車が少ないのでどこへでもとはなかなか廻せない、

(3)採血車が行った場所で採血の監督をして欲しい(医師が少ないので)

右記の様なお話でした。

常任理事会で提案しましたが、実際には日赤の預血を買う場合は、入手までに時間がかかって非常の場合には間に合わない。民間の血液銀行の場合は電話をかければサイレンを鳴らして直ちに届けてくれるので、東京女子医大でも国立の病院でさえも民間の血液銀行には特約しているとのことで、考えさせられました。

採血車が少ないという問題も、無料で献血した血液を高額で、日赤でも売っているのであるから採血車がもっとできてもよいし、血液センターもふやしたら等と、いろいろと正論もわいて結局献血の問題は、日本女医会の事業としては不適当だということで常任理事会で否決しました。

——〈・〉——

先般東京都内の各支部長様をわずらわし、各区の医師会の役員をしておられる女医の方の調査をいたしました。

その結果女医で現に役員をしておられる方は

理事八名、監事二名、代議員二名

以上で東京都内四十二医師会の全役員の三%にも及びません。

何の為に理事会がこの調査をいたしたかと申上げますと、会員の声に依り「日本の女医の数が総医師数の一〇%となっており特に開業医のみの場合ではこの比率は女医はもっと高いので、これからは徐々に各医師会の役員にも女医が進出するように、本部が働きかけるべきだ」という意見から、まず東京都内の医師会の現状を調べて、その役員になっておられる方方の意見を参考にして審議致すことになりました。

ところが現在出ておられるこの少数の役員の方々からさえ一、二の方をのぞいては、役員になった際に、非常に精神的経済的犠牲が多いので興味ある方は別として、特におすすめは出来ない、と申されましたので、理事会で話合いの結果本部からこれを各医師会にお願いすることはやめ、みなさまの御意志にお任せすることになりました。

但しあくまでも日本女医会員として各区の医師会へは協力するようにと話がまとまりました。

東京都内の支部長様には大変失礼でございますが別にお手紙いたしませんのでこの紙面で是非御了承下さいませ。

いよいよお寒さに向います。会員のみなさまにはお体をお大切にご活躍下さいませ。

四一・九・三〇

第十回国際女医会報告（其の二）

国際連絡書記　小野春生

今年七月九日より十五日までロチェスターで開催された第十回国際女医会総会の演題を総括して報告します。

まず国際女医会に参加している国の総医師数、女医数及びその比率は次の通りです

	総医師数	女医数	比率%
デンマーク	六、八〇一	一、二一三	一六・三
フィンランド	三、三四四	八一八	二四・二
ドイツ	八六、七三一	一七、三一〇	二〇・〇
オランダ	一三、六三六	一、七〇〇	一三・一
ノルウェー	四、六五九	五六八	一二・〇
アフリカ（南ア連邦）	七、六五一	七六六	一〇・〇
スェーデン	八、一六三	一、三五九	一五・四
英国	四八、八〇六	七、八五二	一六・〇
ブラジル	四三、一六六	二、九九六	七・一
カナダ	二三、一〇五	一、七五一	七・五
米国	二六四、二七一	一八、五三七	六・五
インド	八〇、一〇〇	九、七〇〇	一一・九
イスラエル	五、五三	一、三三八	二四・〇
マダガスカル	六二九	二九	四・六
オーストリア	一三、五一四	二、三四九	一七・一
イタリア	八八、五五〇	一八、六五〇	一八・八
スペイン	三七、七四三	九二五	二・二
スイス	八、三六九	一、一三七	一三・五
オーストラリア	一四、〇一四	一、七六七	一二・六
ホンコン	一、二七〇	一八四	一四・五
日本	二〇、八五九	一〇、二六二	九・三
フィリッピン	一八、六二一	四、六〇二	二四・七
国民政府	七、九〇四	五五〇	六・九
韓国	九、〇〇〇	一、四五〇	一六・一
南ベトナム	一、〇六一	六五	六・一
タイ	四、〇六八	一、〇一七	二三・八
フランス	五四、七六四	七、二一	二・八

で職種別は一般医が一番多く、ついで公衆衛生、内科、小児科、精神科、産婦人科、病理等に多くの女医が関与しています。インド等では女医の三割近くが産婦人科であります。

昨年女医卒業生は

（男女比）

デンマーク	四八	一九・四	
フィンランド	四〇	一八・五	
ドイツ	九二一	三五・七	
ノルウェー	三七	一七・一	
スェーデン	七六	二四・一	
英国	五三五	二六・一	
カナダ	九四	一〇・一	
米国	五〇三	六・八	
インド	一、七〇〇	二四・二	
イスラエル	一七	一九・三	
マダガスカル	三	八・五	
オーストリア	五九	三〇・一	
イタリア	二七四	一〇・九	
スペイン	一四八	八・四	
スイス	四五	一四・九	
オーストラリヤ	八一	一二・三	
日本	二三九	八・〇	
南朝鮮	七〇	一〇・〇	
ヴェトナム	三二	一〇・一	
タイ国	六九	二六・四	

NIH国立公衆衛生院

世の中の文化、科学が進むにしたがい、健康に対し皆が関心を持つと共に科学者の不足が出て来ました。今となりますと世界の女医がその不足を補うような時代がせまって来ました。つきまして何が女医の能力を充分に発揮することをさまたげているかよく考慮することが大切であります。女医には家庭に入るとその方へ重点をおくため団結力が劣しい。もつと団結するとともに他の婦人会に入り、女として又女医としての経験をいかして働くべきであります。文明国に於ては結婚をすると家庭の仕事、育児等におわれて医学面に働くにも、手伝がないので困る。もっと皆が協力して働く女性のための保育施設を作ることや又母親でありながら医学をするにはパートタイムで働ける様に関心を向けるべきであり、又数年間医学から離れた女医のために再教育をする様に皆が協力すべき

である等各国とも同じ様なことになやまされているとの報告がありました。又すべての点で男医と女医と平等であつてほしいこと。病院建設に際しいろいろの改善をする委員会に、女医の参加をもとめる様にしてほしい等の要望がありました。

これらの事を全部まとめて前号に発表した通り各国の政府に国際女医会として要請することに致しました。

NIH国立公衆衛生院見学記

NIH国立公衆衛生院はワシントンのベテスダにある米国政府の経済的援助による研究機関であります。南米行きの先生方とホテルで別れ、一行は市外の世界的に有名なNIHに向いました。ホテルよりやく車で三十分、ワシントンでは歩行者は横断歩道以外は違反としてとりあつかうため皆が礼儀正しい）ラッシュといえども交通はスムースに割込み等をする車はなく広い敷地のNIHの入口に到着。ここは癌、心臓、アレルギー及び伝染病、関節炎及び代謝障害、小児健康及び発育、歯科、医学一般、精神衛生、神経又び盲目等の研究所よりなり、数千人の医師の中に日本からの医師もいるとのことでした。建物から建物へはバスがかよっていました。

クリニカルセンターには運動場があり、又手芸をするところなどもあり、夜はパーティー、ダンス等の出来る所があり医学の進歩のため、研究のための患者にはいたれり、つくせりのサービスが見られました。お昼は職員も医師も私共も一緒にカフエテリヤでお食事、お盆やナイフ、フオークを自分で持ち、すきなものを取り、会計へ持って行くなど最少限度の従業員で食堂をまかなうのは実に米国的と思います。

午後は国立医学図書館見学、日本の津田氏がおられました。当館の目的は世界のあらゆる医学文献を集めて、医学の進歩のために便宜をはかるために米国の文部省厚生省が主になって行っている所です。皆様のご存知のIndex Medicus はここで作られるのです。いろいろと機械化されていましたが、文献を分析し項目別にするのは、やはり人間でなくてはいけないとのことでした。

ここには一、二〇〇、〇〇〇以上の文献が何時でも出せる様に整理されており、世界の医学図書館から図書館へ貸出しが出来る様になっていました。いろいろと勉強させられ有意義な一日でした。

〝我々女医の目的〟を聴いて

山崎倫子

一週間に亘って行なわれた第十回国際女医総会の学術会議の最終日に、ペンシルバニア女子医科大学の名誉学長ドクター・マリオン・フェイ女史がまとめとして我々女医の目的と題して大変有益な講演をなさったので、その内容をご紹介すると共に私個人の感想も若干加えて御報告する次第です。

〝四日間に亘って統計資料の交換、医師相互間及び対外部門との相互関係、女医の地位と役割、女医の需要とその適した活動分野等について各国から報告があった通り我々はそれぞれの分野に於て日常活動を続けているが、果して我々は現在の状態のままで満足していてよいのだろうか、我々は世界の医学に対して何かめざましい貢献をしているだろうか、来る日も来る日も個人の患者に対する医療を施すだけで満足しきってはいないだろうか、M・Dという資格を得ることのみが果して我々の目的なのだろうか、それとも我々が為さねばならないもっと大きな役割があるのではないだろうか。教育、公衆衛生、医療行政において我々女医は一体何を分担すべきなのか……よく考えてみたい。

講演中の筆者

我々女医が目的とすべきものは先ず大きく二つに分けられると思う。そのひとつは直面した課題として早急に方法を講じなければならない諸問題であり、もうひとつは永い目でみた将来に向っての課題である。

㈠世界各国における諸統計を集め交換すること。㈡女医が医業を継続して行く為の障害、例えば家庭と医業を両立させる際の家事、育児に対する雇用者不足の問題、託児所、保育所の設置等、どのように解決し且つ具体化すべきかということ（註、西欧諸国では平均して二〇％の女医が家庭に入ると医業から離れてしまっているし、オーストラリヤでは五〇％という甚だしい数の女医が切角女医になりながら医業を放棄してしまっている。その点日本では医業に従事しないものは、例年五％前後でしかもこれは老令による引退者をも含めた数である）。㈢優秀な女子学生を発掘し医科進学を奨める等、医学を志望する女性の増加を計ること。㈣女医の職場の問題として、パートタイムの仕事を認め且つ多くを女医に解放すること。二人の女医がチームになって一人前の仕事を分担すること、女医により適した分野を開拓すること等（註、カナダでは結婚している女医は就職が比較的困難である、スイスでも女医に対する需要が少なかったが近年やっとかわって来た、そして放射線医学こそ女医に最適の分野である等の報告がありました）。㈤女医の再教育として、結婚や育児の為、或いは病気で医業を離れていたものが何時でも医業に復帰出来るようにする為に、又最新の医学に遅れない為に、一貫した事業として再教育の場所と機会を作ること。㈥各国女医の交流を計ること。

以上は目前の問題として非常に重要な事である。速かに検討し、解決し、実行に移すよう努力して行かなければならない。

次に、今や二十世紀も残す所三分の一になったが、我々女医は今後何を考え何を目的としてゆくべきかを考えたい。

環境の汚染、薬物中毒の影響、人口増加の三つは永い将来を考える時、最も重大な問題として考慮しなければならない。

環境の汚染としては第一に空気、第二に水、第三に土壌が問題になる。核実験による大気汚染、又工業の発展や車の排気ガスによる空気の汚染、工業廃水、或いは一般汚物、雑芥の不完全処理によって惹起される海水、河川、地下水の汚染、灌漑用水から飲料水まで、又魚貝類や動植物の生存までが二次的に脅かされつつある今日、又地域的には汚物や寄生虫や原虫等によって汚染されている土壌の問題等……近年になって企業体の責任とか、国家や、都市当局がその改善及び予防にやっと努力をみせ始めてきたばかりである。女医として、又社会人として我々は何を考え、何をなすべきだろうか。

㈠めざましい医学の進歩と新薬の発見によって多くの疾病は姿を消し或いは激減し、一見健康な社会が建設され

つつあるかの如くみられるが、その反面に多くの新しい医原性及び薬原性の疾患が増加しつつある事は、おろそかに出来ない問題である。我々は日常新薬を使うことによって試験管内実験とは異なり、貴重なしかも尊い人体実験を行なっているのであるが、果して我々は科学者として、又医師として真摯な態度で所謂新薬を使用しているだろうか。新薬を慣用しすぎてはいないだろうか。サリドマイドの例もある様に、抗生物質、ステロイド剤、精神安定剤、経口避妊薬等々を安易に考えすぎてはいないだろうか。最近では人口調節を目的として、経口避妊薬を用いている大キャンペーンもあるし、一般人も安易に経口避妊薬を連用している傾向がみられるが果してこれ等はまったく安全なのだろうか。我々は新薬の使用に際してその本質を極め、万全の注意を払い、尊い臨床実験を行うものであることを認識しているだろうか。

我々は人間尊重を心に銘じ、不屈の勇気をもって人間生物学に貢献する覚悟をもたなければならない。

㈢人口増加、特に未開発国及び経済力の低い国々における無制限の人口増加は実に由々しき問題である。天然資源や食糧生産の問題は先ずおくとしても、食料の質と量について、食生活に関する正しい認識例えば栄養素、ミネラル、ビタミン等の栄養的問題、食習慣の改善や食物に対する偏見について等、取上げるべき問題は限りない。又個々の家庭における家族計画や更に大きなキャンペーンとしての家族計画の推進等我々女医に求められるものは非常に多い。

我々は自国の地域社会に、否国民全部に健康な社会を作る為の協力をしなければならないし、ひいては全世界の健康計画に貢献しなければならない。我々は家庭の主婦であると同時に各国の、そして各市町村の主婦でもある。我々こそ環境の汚染防止に、衛生教育に、真摯な医療を通しての人間生物学に、そして人口問題に、指導的役割を担う者として努力し協力して行かなければならない〃

以上はフエイ女史の講演内容を意訳したものですが考えさせられる事が多いと思います。

先ず今回のテーマ〝Optimal Utilization of Medical Women Power 女医の能力の最適な利用法〃は私達日本の女医にはピンとこなくて真の意味が掴めないままに会議に参加した次第でしたが、四日間に亘った学術会議を終えて始めて成程と納得した訳です。(1)女医志望者が極端に少ない、(2)学費が高い為に入学を躊躇する、(3)結婚との両立が非常に困難、(4)結婚生活や育児の為に医業を放棄してしまう割合が非常に高い、(5)法的制限こそないが女子医学生の数は二十～二十五％でおさえられるし、就職も実際には容易でなく、特に結婚している女医にはハンデイがある、(6)家事従事者が不足であり、又あつても報酬が非常に高い、更にその為の特別な税法措置がない、(7)夫婦の所得が合算され綜合所得として課税される、等々日本とは多少事情の違う点がある訳です、従って外国では何とかして女医を増やしたい、一旦女医になったものは医業から離脱するのを防がなくてはならない、何とかしてパートタイム制の職場を確立しなければならない、等々、どうしたら最高の条件で最も有効に女医を総動員出来るかという事が根本的に重要な問題であった訳です。

ふりかえって日本でも、結婚し、子供が出来てもおばあちゃんにみて貰えるという時代ではなくなりつつありますし、生活の近代化と共に私達も同じ様な問題に直面しつつあります。特にパートタイムの職場の開発には是非努力をしてほしいし、諸先輩のご尽力をお願いしたいものと思います。又法的に或いは表面的には男女医の差別はありませんが、残念な事に全くないとはいいきれませんし、実質的にその差を認めなければならない事実が多い事も本当です。その点から専門知識に於いても、医学的常識に於いても再教育をルーティンに行ない、参加することに、我々日本の女医も真剣に考える必要があるのではないでしょうか。

日本医師会の武見会長がよくいわれるように、アドミニストレイティブ・メジシンを考えねばならない時代です。社会のそして時代の変遷を考えないでは、我々日常の医療も、医学教育も、公衆衛生も本当のものにはならないのではないでしょうか。日本女医会も、もはや親睦を目的とする段階から一歩前進して欲しいと切望する次第です。

アメリカの旅雑感

川野辺静

▼アメリカの暮しから

第十回国際女医会議については、すでに会誌二十七号日本女医会誌上で三神先生から会議について、小野先生から理事会その他について、又日本からの発表者山崎倫子先生の御講演内容なども詳細に御報告がありましたので、私は国際女医会議を機に計らずも三度訪れたアメリカの旅雑感を書かせて頂きます。

前号で御報告のありました通り、至誠会員二十七名、加多乃会二名、名古屋市立大卒一名でしたので毎日至誠会の集いに出席しているかのよう。各地域の開業のご様子やご勤務の様子など、又学校や病院、至誠会へ日頃お持ちのご意見などを充分伺うことが出来、大変良い参考になりました。

メーヨクリニックの見学をおえて筆者（左より二人目）

卒業生が母校に何を希望し、どんなことを考えていられるか、又至誠会や日本女医会の在り方などに就いても、バスの中、飛行機の中、食事の時などにざっくばらんに話し合えたことは、またとないよいチャンスでありました。

旅というものは日頃の多忙さから解放され、身も心ものびのびとします。

そしてそんな時には案外人々にアレコレと名案を思いつかせるものです。今回の旅行で出た話題や種々の案はただの話題で終らせないで何かの形で実らせ度いものと願います。

加多乃会の方ともスッカリ親しくなり旅なればこそとこれも又嬉しい収穫の一つでした。共にくらすことの大切さ、人と人とのふれ合い、じっくり話し合うことの大切さなど、この旅を通じて今更に感じました。

アメリカといえば、先ず自由を誇り尊重し大切にしていることはご承知の通りです。その自由の国アメリカに行く度に日本人である私の心に、ピンと感じますもの、それは自由を誇るアメリカがルールに酷しく秩序の正しい国であり、国民であるということです。アメリカでは医師の広告、病院の広告は一切見られませんが、医師会で広告はしないと約束が出来れば、その約束はかたく守られます。交通にしても信号は正確に守られ、スピード制限に而りで、万一規則に違反すれば酷しい罰則があるのみで誠にはっきり処理

されています。

一旦州や街、団体、などできめられたことは何事もその方針で推進され、日本で時々見られる所謂「ごねどく」という事態は成立もしないでしょうが、そんな事態も起きないという事です。

従って顔役とか権力者、特権階級というものの力で、横車で押すということなど考えられもしないでしょう。中小企業者や薄給生活者が税金で苦しんでいるかと思えば、特権階級者や大事業家の脱税行為が平然と何年間もまかり通っている日本に比べ羨しい限りで、真の自由、秩序、罰則などについてつくづく考えさせられたのでした。一人一人は自由に存分に自己の意見も述べ行動もとれるアメリカ人が、一旦国を中心として物を考え行動する時、実に素直に国の方針に歩調を合わせ、個人を忘れるアメリカ国民の態度にも頭の下るものを覚えました。又一人の意見は案外少く、団体となると国が定めた方針にも同調出来ず、時に狂暴的行動にまで出る日本人とは誠に対照的なものを感じます。

買物店で、役所の窓口で、乗物で、あらゆる場所で順序を守る気持よさ、一年中で雨は十日位しか降らなくとも水に困らない生活の工夫をやる気でやっている国民性、過去の英雄、偉人を誇り大切にし、祖国アメリカ国旗を中心に生活するアメリカ国民の祖国愛にも又敬意を感じた旅でありました。

▼国際女医会議参加雑感

日本人は世界中で語学の弱い国民としてトップクラスの由、私もその日本人ですがこれからの若人は勿論、手おくれながら、五十、六十の手習いも現代に生きる上に必要なことと感じました。

日本参加団の一行の中に特に語学のお強い三人の諸姉のいられたのは心強いことでした。そのお一人、山崎倫子姉は会議四日目に演説されましたが、語学、態度、内容共に素晴しく、出席者全体に大きな感激と驚きを呼び、同席の私など肩身の広い思いをしました。

又国際女医会連絡書記として日本女医会を代表して国際女医会で活躍の、小野春生姉もそのすぐれた語学と社交性で堂々たる書記振りを発揮していられ心強さを感じました。

佐野アヤ子姉はメイヨークリニック、女子医大、国立研究所、スタンホード大学等その他各地での見学でお得意の語学を十二分に発揮活用されて、一行の見学を大変有意義にして下さいました。

このお三人の語学力が一行の旅にどんなにプラスであり、又一行の頼りでもあったかそして国際女医会議参加にも意義があったかを思うにつけ、語学は誠に大切なものと今更に痛感しました。

▼国際女医会の旅と今後

国外、国内を問わず旅に出ると、とかく慾が深くなって折角来たのだからここもかしこもと思うのが常ですが、スケジュールは慎重に余り慾をかかないで、先ずその旅の目的に忠実にありたいものと思います。

数十人ともなれば夫々の立場で希望もあり、その異なった希望をスケジュールに全部盛り込むと、旅行目的がピンボケしてしまうことになります。

そこで

観光班（観光目的グループ）
見学班（施設とか病院見学グループ）
研究班（学会目的グループ）
（仮称）

等数班編成とし時に分れ、時に一体となって特徴付けをすることも一案と思います。少くとも国際女医会出席者決定の時には、その旅を有意義にする為に、委員会を編成して充分検討すること等もよいのではないでしょうか。いつの日にか恐らく近い将来に東京会議も実現されることでしょう。その日の為にも、否それ丈でなく国際女医会議は日本女医会としても、一つの重要な今後の課題として考えなくてはならないということも感じたものであります。

メーヨークリニック見学の記

佐野アヤ子
山崎倫子

世界中の医師のメッカと云われるメーヨークリニックはアメリカの北西部、ミネソタ州のローチェスターという穀倉地帯の真中にある、まるで離れ小島のような人口五万ばかりの小都市にある。塔屋のついた十五階建レンガ造りのプラマービルディングと白大理石を張りつめた十階建の新館、メーヨービルディングが町の中心にメイン、ストリートを隔てて向いあっている。他にメーヨー研究所、図書館、放射線治療センターのあるモダンビル、グラジュエートスクール（大学院に相当する）のあるハーヴィツビル、メーヨー財団事務所等がたち並んでいる。

メーヨークリニックは今から一〇二年前即ち一八六四年に英国から移住して来たウィリアム、Wメーヨーによって小さな診療所として発足したのだったが、彼の二人の息子、ウィリアム（一八六一～一九三九）とチャールス（一八六五～一九三九）のメーヨー兄弟がこれを飛躍的に発展させたのである。主体は外科の領域であったが現在では総合クリニック（外来診療のみ）で四百四十人のフル、タイムの医師と約二千四百人の従業員が常時働らいている。入院加療を要するものは関係病院である聖、メリー病院と、ローチェスター、メソジスト病院に入院する事が出来、メーヨークリニックの医師達によって治療を受けることが出来る。この二つの病院は合せて一五〇〇のベット数を持ち、約二五〇〇人が従事している。今やアメリカ全土は云うに及ばず世界中の国々から来る患者で一杯で、要所には案内所が設けられ数ケ国語を話す係員が整理にあたっている。

殆んどの診療や検査はプラマービルとメーヨービルで行われている。五階以上の各階には約八〇の検査及び診療室があり、各部屋の外側には赤、黄、緑、青、紫、等色別の丸いサインがあり使用中は、中で診察をしている医師の色が点灯される仕組みになっている。各診察室は広々として簡潔で脱衣所が隅に設けられているだけで、余分なものは何一つない。医師のいる診察室に患者が入れかわり次々に入ってくるのではなく、患者をいれた診察室に医師が必要カルテを持って診察に廻るのである。従って患者は落ちついてゆっくりと診察を受けることが出来る訳で、説明によると最初の一般診察には平均約二時間位かけるとの事であった。尤もこの診察を受けるには主治医からの紹介状を持っていても予約の順番がくるまでに約三週間、世界の各地からいきなり紹介なしで来て申込んでも、少くとも一週間はホテル住いをして待たなければならないとの事であった。

精しく述べていては限がないので省略するとして非常に感心したことのひとつは、カルテやレントゲン等の記録管理と、それが一旦必要のある際には圧搾空気によって二哩離れた病院にさえも僅か十数秒で送られるということであった。患者一人一人の記録は古くは十年間にさかのぼってすぐだせる様にまとめてあるとのことであった。カルテ室では何人もの事務員がまるで戦

場でもあるかのように、ある者はカルテを探し、又ある者は太いゴムベルトでぎっしりとまとめ或いは筒に入れ、まるで弾丸を砲身につめ込むように圧搾管にほうり込んで送り出す作業に追われていた。

清潔そのものの病院、一流ホテルのサロンのような待合室、機能的な諸設備、充分な人員で充分な時間をかけて行なう最新の検査と医療、その物的背景には比較すべくもなく只感嘆しつつ短い見学を終えた。胃カメラやファイバーガストロスコープは日本の方がはるかに進んでいますよ……というドクターの声を後に、暑い陽ざしの中をホテルに急ぎ戻った。

話は余談になるがアメリカでの最初の夕食を私達はここローチェターのホテルでいただいたのだったが、それは美味しくてアメリカ滞在二十日間のうちでも最も楽しい、おいしい想出のひとつとなった。勿論田舎の小さなホテルで大都市のホテルとは比較にならなかったし、食堂も質素で狭かったがとても家庭的で気持がよかった。ローストチキンとオーブンで丸のまま焼いたじゃがいもがメイン、デイシュだったが、そのチキンたるや〝ぼあん〟としてたボリウム、縦にわった半羽の雞と大人のこぶしより大きなふかふかのポテトが大皿からはみだしそうにのっているんです、他にいんげんのソテー、生野菜のサラダ、果物にデザート……、そしてピンクのユニホームを着た給仕のオバサン達の愛嬌がよく親切だったこと……。さすがに全部平げた人はなかった様でしたが、後々までミネソタ、ローチエスターのチキンは……あのじゃがいもは……と皆さんの口の端にのぼったものでした。

又丁度国内航空がストに突入し私達はバスでシカゴに向うことになったが、シカゴまでの七時間半のバス、ドライブは又想出深いものだった。広々とした果しない草原、所々にみる放牧、シャイロ、湖と森、淡々と続くハイウエイ、昔、ロレッタ・ヤングがアカデミー主演女優賞をとった〝ミネソタの娘〟という映画、そして主題歌の〝私はミネソタの卵売り〟という唄をなつかしく思い出したりして、普通だったらみられないアメリカの一面を楽しむことが出来てかえって幸運だったと思いがけない航空ストのとばっちりを喜んだ次第でした。

十一カ国の女医一堂に
――国際癌会議開催を期に　於東京――

渉外係　柳瀬路子

最近東京で国際的な学会が催される事が頻繁になるにつれ外国の女医さんとの交流も次第に多くなっています。十月二十八日癌学会の開催を期に医師として或いは夫人として来日された女医さん二十二名をオータニにお招きしたのですが出席者はオーストリア三、オーストラリア三、デンマーク三、ドイツ一、オランダ二、香港二、イスラエル一、タイ一、大英王国二、アメリカ四、日本二十のメンバーで、非常に盛大な会でした。いつもの会は黒髪の中に一つ或いは二つの金髪が混るというところであるが、今日許りは黒髪が目立たず金、銀、褐色、黒茶色とりどりのお国振りで、目の色、顔立ちから表情まで千差万別の女医さんが一つのテーブルを囲み、杯をあげ微笑し歓談し手を握り合っている光景は誠に国際的であった。

於ホテル・オータニ　アントアン国際女医会長（左より四人目）その右龍会長

会は小野理事の軽妙な司会に初まり龍会長立つて先ずオーストリーのアントワン女史に国際女医会長に就任されたお祝を述べられ、英国の代表には一九五八年国際女医会入会の為ロンドンへ行った折の謝辞をのべ、ドイツの代表には一九六〇年バーデンバーデンの折の親切を感謝し、米の代表には本年ロチエスター大会の折日本代表に講演の機会を与えられた事を感謝された。

会長はロンドン大会の思い出として、和装で通された会長に帯が珍らしがられ、「あの長い物をどうしてまとめるのか」という事で何度も解いたり医んだりさせられたとつけ加えられたついで立たれたオーストリヤアントワン国際女医会長は、「構成メンバー三十四カ国の中十一カ国の代表が一堂に会した今夕の集いは素晴らしいと謝辞を述べられ一九六八年ウイーンでひらかれる大会には是非皆さん御参加下さって議題 Hungry Millions に関し大いにディスカッションして頂きたい」と述べられた。三神先生の発声で乾杯後食事のコースに入り、食事後小野理事の指名でオーストリー、オーストラリア、デンマーク、ドイツ、オランダ、香港、イスラエル、タイ、英、米の代表が逐次立ち上って謝辞を述べられた。スピーチの中特に印象に残ったのはオランダのバン、ギルゼ女史がオランダではレントゲン治療に携わつている女医が多い、私もその専門医として特に乳癌のパートをやっているが女医には適当な仕事と思うといわれた事。

米の代表が traffic accident の多い事 Base boll の盛んな事は日米両国の共通点であるが今日の集りは Base boll でいえば Home run である。といわれた事。及び英の赤いドレスを着たデップリとよいお年の女医さんが美人らしいユーモアで笑わせ乍ら、女チャーチルさながらに挨拶された事であった。

終りに山崎倫子氏は先般ロチェスターで発表された材料をもとにして（本誌二七号掲載）日本女医の現況について説明され、和気靄々の裡に記念撮影を終えて散会した。

食事の間我々も同席のオーストリー、アメリカ、オーストリヤの女医さん達と誠に訥弁ながら種々話し合ったが、どの女医さんも寿司殊に海苔巻を賞め、箸が使えると言って自慢していたが、他方どこの女医さんも「女医さんの何%が医師として実務についているか」という事を質問し、又米国の女医ですらも一度家庭に入ってしまったら場合現職に復帰する事は仲々困難であるかに見られた。以上当日の様子をかいつまんで御報告申上げる次第です

（四一、一一、二九）

各県各区支部長殿

各県各区支部長の任期は来年三月末日までですので本部役員改選と同期に願います。

尚各支部会を開催されます際は、必ず本部に予め御連絡下さるようお願いいたします。

会長　龍　知恵子

会費十カ年分前納者

佐竹　冽子　藤岡　邦子
小出　つる子　金重　律子
石井　雅枝　古市　千代子
平松　麗子

昭和四十一年十一月十日　印刷
昭和四十一年十一月十五日　発行
編集人　福田　幹
発行人　日本女医会
東京都新宿区市ケ谷河田町19
発行所　日本女医会
電話 (341) 〇九六八
振替東京六九九六八
印刷所　東京都港区麻布田島町63
興栄美術印刷株式会社

（題字、故吉岡弥生）